

# 生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2003年度

2004年3月

生駒市教育委員会

# 生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2003年度

2004年3月

生駒市教育委員会

## はしがき

生駒市内は、国指定史跡の行基墓、国宝の長弓寺本堂をはじめとして多くの文化財があります。

生駒市教育委員会では、このような先人が残した貴重な文化財の保護に努め、地下に眠る遺跡についても発掘調査を継続的に実施してまいりました。本報告書は、平成15年度に発掘調査を実施したもののうち、国と奈良県の補助を受けて個人住宅の建築工事に先立つ発掘調査についてその結果をまとめたものです。本書がわずかでも各分野の研究の一助となり、地域の歴史を掘り起こすこととなれば望外の喜びです。

本年度の調査におきましては、建築主の皆様ならびに調査地周辺の皆様、関係諸機関に多くのご協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。

また、今後とも本市の文化財保護に対する御理解と御支援のほどを、よろしくお願い申し上げます。

平成16年3月

生駒市教育委員会

教育長 中川克己

## 例　　言

1. 本書は、国庫補助50%・県費補助25%・市負担25%（総額1,000,000円）で実施した、個人住宅の建築工事にともなう発掘調査の成果を主として掲載した概要報告書である。
2. 現地調査は、調査原因にかかる個人の依頼を受けて、奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、生駒市教育委員会生涯學習振興課 矢田直樹が担当した。
3. 現地の土色および土器の色調は、「新版 標準土色帖 1999年版」を参考している。
4. 遺構写真・遺物写真は矢田が撮影した。
5. 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、生駒市教育委員会において保管している。
6. 調査および本書の作成にあたり、下記の方々からご指導・ご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。(敬称略・順不同)

寺澤 薫	岡林孝作	平松良雄	株式会社アート
久保文雄	久保雅彦	福原成吉	富岡ヒサノ
中堀賢一	中堀千絵	上山彪	上山幸生
7. 現地調査および本書作成にかかる整理作業には、下記の方々の協力を得た。

池田計彦	石田和哉	岡田雅彦
岡本怜嗣	島田侑子	松原智子
8. 本書の執筆・編集は、矢田が行った。

裏表紙　　文化財愛護のシンボルマーク

両手のひらと日本建築の伝統的要素である組物（くみもの）をイメージしたパターンを3つ重ねることにより、過去・現在・未来にわたる永遠の伝承を表現したものです。

# 目 次

はしがき

例言

目次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要 ..... 1

II 位置と環境 ..... 2

- 1 地理的環境
- 2 歴史的環境

III 萩原遺跡第13・14次発掘調査 ..... 5

- 1 はじめに
- 2 位置と環境
- 3 萩原遺跡第13次発掘調査
- 4 萩原遺跡第14次発掘調査
- 5 まとめ

IV 小平尾東遺跡第2次発掘調査 ..... 14

- 1 はじめに
- 2 位置と環境
- 3 遺跡の調査
- 4 まとめ

図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 生駒市位置図 .....	2
第2図 地形図 .....	3
第3図 調査地周辺遺跡分布図 .....	5
第4図 調査地位置図 .....	6
第5図 トレンチ配置図 .....	7
第6図 遺構平面図・土層図 .....	7
第7図 遺物検出状況図 .....	8
第8図 出土遺物実測図 .....	9
第9図 トレンチ配置図 .....	11
第10図 遺構平面図・土層図 .....	12
第11図 出土遺物実測図 .....	13
第12図 調査地位置図 .....	14
第13図 遺構平面図・土層図 .....	15

## 表目次

第1表 2003年度（平成15年度）埋蔵文化財発掘届出・通知、 遺跡有無確認踏査願、発掘調査件数 .....	1
第2表 2003年度（平成15年度）実施発掘調査 .....	1

## 図版目次

図版1 萩原遺跡第13次発掘調査	1 調査地付近航空写真 2 着手前状況
図版2 萩原遺跡第13次発掘調査	1 北壁土層 2 遺物検出状況
図版3 萩原遺跡第13次発掘調査	1 遺物検出状況 2 遺構掘削後状況
図版4 萩原遺跡第13次発掘調査	出土遺物
図版5 萩原遺跡第14次発掘調査	1 着手前状況 2 遺構掘削後状況
図版6 萩原遺跡第14次発掘調査	1 ピット5 (SP05) 2 土坑1 (SK01)
図版7 萩原遺跡第14次発掘調査	1 出土遺物
西松ヶ丘所在遺跡第1次発掘調査	2 西壁土層
図版8 小平尾東遺跡第2次発掘調査	1 着手前状況 2 掘削後状況

## I 埋蔵文化財発掘調査の概要

生駒市では、昭和30年以降、土木工事等の開発行為が進み、地理的環境・歴史的環境が大きく変化している。土木工事等の開発行為の増加とともに、遺跡はその姿を消している。

このような状況のなかで、生駒市教育委員会では、1987年に市内の遺跡分布調査を実施し、「生駒市遺跡分布調査概報」を刊行した。1990年には、新たな調査成果をもとに、「生駒市遺跡地図」の改訂を行った。その後も、奈良県立橿原考古学研究所や生駒市教育委員会の調査等により遺跡範囲の拡大や新規発見があり、遺跡地図の改訂が必要な時期である。

2003年度（平成15年度）3月15日現在で生駒市教育委員会が取り扱った埋蔵文化財発掘届出・通知、遺跡有無確認踏査願、発掘調査件数は第1表のとおりである。また、2003年度（平成15年度）3月15日現在で実施した発掘調査は第2表のとおりである。

本書には、国庫補助・県費補助事業として実施した萩原遺跡、小平尾東遺跡の調査概要を収録している。

埋蔵文化財発掘 届出 通知	合計	遺跡有無確 認踏査願	試掘・確認 調査	発掘調査	立会調査	慣重工事	調査合計
18 0	18	6	0	7	6	0	13

第1表 埋蔵文化財発掘届出・通知、遺跡有無確認踏査願、発掘調査件数

番号	市遺跡地図番号 県遺跡地図番号	遺 跡 名	調 査 地	現地調 査期間	調査原因 (原因者)	調査 面積	備 考
1	66 4-D-36	萩原遺跡 (第13次)	萩原町266、 265-1の一部	030501 030502	個人住宅 (久保文雄・雅彦)	7.5m <sup>2</sup>	本書Ⅲ所収
2	66 4-D-36	萩原遺跡 (第14次)	萩原町454、 456の各一部	030804 030806	個人住宅 (福原成吉)	5 m <sup>2</sup>	本書Ⅲ所収
3	80 4-D-52	遺物散布地 (第4次)	東生駒1丁目 298-1	030805	共同住宅 (木谷智子)	2 m <sup>2</sup>	約1.5mの盛土
4	51 4-D-39	中菜畠・ 一水口遺跡 (第8次)	中菜畠2丁目 1073-3ほか	030512～ 030630 030731～ 031024	店舗 (株式会社オークワ)	1,500 m <sup>2</sup>	弥生時代後期から古墳 時代中期にかけての水 路を検出
5	79 4-A-2	遺物散布地 (第1次)	東松ヶ丘 1175-59	031020	個人住宅 (中島賛一・千絵)	4 m <sup>2</sup>	遺構・遺物なし
6	54 4-D-1	一分コモリ遺跡 (第8次)	壹分町1195-1 の一部	031104	共同住宅 (藤尾俊一)	2 m <sup>2</sup>	盛土内工事に設計変更
7	68 4-D-47	小平尾東遺跡 (第2次)	小平尾町201-1、 201-2	040308	個人住宅 (上山彪・幸生)	3.6 m <sup>2</sup>	本書Ⅳ所収

第2表 2003年度（平成15年度）実施発掘調査

## II 位置と環境

### 1 地理的環境 [第1・2図]

生駒市は、奈良県の北西の端に、その名がしめすとおり生駒山脈の東側に位置している。東西7.8km、南北14.9kmと南北に細長く、西は大阪府、北東は京都府、東は奈良市と大和郡市、南は平群町、斑鳩町に接する。

地形的には、主峰生駒山(642m)を中心とした山脈の東斜面と、矢田丘陵から西の京丘陵にはさまれた山間部である。西山中と称されることもある。そうしたなかで、河川によるわずかな谷底平野がみられ、平野部ごとに地域を細分することが可能である。

北部から北東部にかけては、富雄川水系の谷底平野と丘陵部が広がっている。

北西部から南部の地域は、生駒山地と矢田丘陵にはさまれた盆地状の地域である。天野川水系と竜田川水系にわかれており、南北二つの谷底平野が接するような関係にある。

北西部は、天野川水系の谷底平野である。川の東側の平野を生駒市、西側を四条畷市と、川により大阪府との境界をなしている。

中央部から南部は、竜田川による平野を形成している。東西の幅が数100mと比較的に広い場所もあり、市内では比較的平坦な地域が広がっている。

### 2 歴史的環境

生駒にいつ頃から人が住み始めたかは定かではないが、『万葉集』や『日本書紀』などの文献にたびたび登場し、古くより大和と河内を結ぶ交通の要衝であったことがわかる。

人の存在が確認できるのは縄文時代からである。市南部の小平尾町付近で縄文土器が出土したといわれ、南田原町地内での発掘調査では石器が出土している。その実態はまだ不明である。

弥生時代についても、萩原遺跡や上町付近など市内各所で遺物が確認されていたものの詳細は不明であった。近年の奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査から、弥生時代の遺構があいついで発見されている。中柴畠・一水口遺跡では、後期から古墳時代初頭の住居域を区画するとみられる溝が、西畠遺跡では、中期の住居跡が確認されている。2001年の萩原遺跡の調査では、弥生時代中期の水路とみられる溝を検出している。

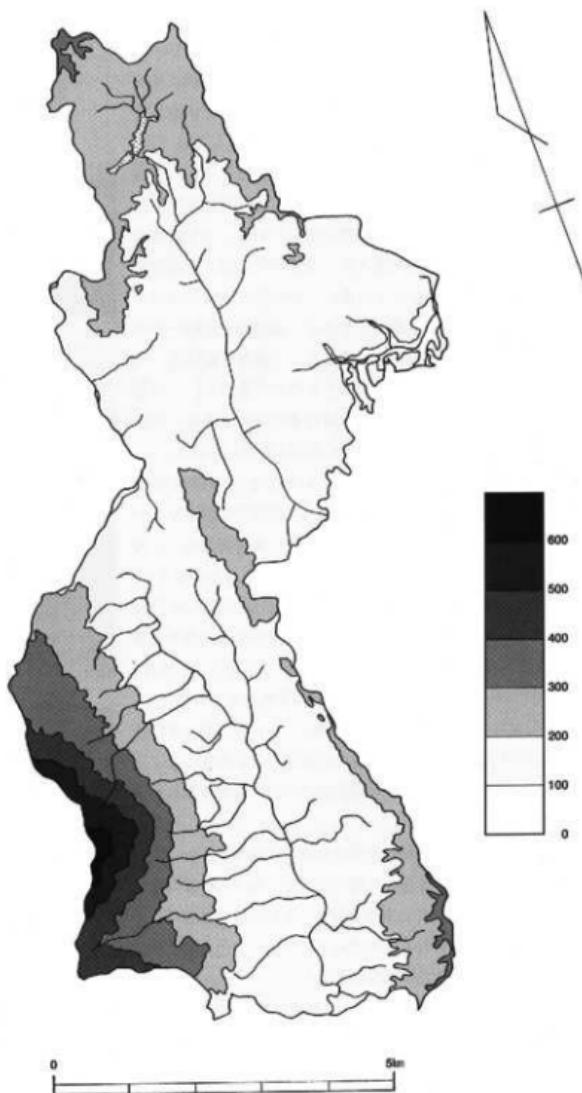
古墳時代の遺跡として、竹林寺古墳が古くより知られている。古墳時代前期の前方後円墳で当初の全長は60m程度あったと考えられている。1939年に後円部の主体部の調査が実施されている。擾乱後であるが、特異な内部構造を持つことが明らかとなっている。遺物として、「長宜子孫」の銘をもつ舶載の内行花文鏡をはじめ、石劍、鉄刀、鐵劍、鐵釘、円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪などが出土している。



第1図 生駒市位置図



竹林寺古墳



第2図 地形図

また、弥生時代と同様に竜田川の流域には古御時代の遺跡が広がっている。一分谷遺跡では居館にめぐると推定される大溝が確認されている。西畠遺跡は弥生時代に引き続き集落が存在し、土坑からは大量の土器が出土している。

奈良時代になると、生駒は須恵器生産の拠点として市内各所に窯が営まれる。その数は不明だが、市域の中部から北部にかけての地域で相当の数があったことであろう。金比羅窯跡からは「官」もしくは「宮」と線刻された杯蓋が出土している。上町の庄の谷遺跡はそうした須恵器生産にかかわる工人の集落であろう。西畠遺跡では大型建物跡が検出されており、この地域を治める拠点と想定されている。また萩原では明治5年に開墾中に銅板墓誌が発見され、奈良時代の官人の美努岡萬のものであることが明らかとなっている。この時代で忘れてはならないのは、行基である。『行基年譜』によると、慶雲4(704)年に「生馬仙房」を建立し、和銅7(712)年までここで修行を受けた。行基はここを拠点に新都平城京での布教をはじめたのである。この仙房は、有里の竹林寺をさとされ、境内には行基の墓所がある。生駒は平城京から近く、人々の活動も平城京と密接に関係していた。

中世に入ると、鷹山庄・上鳥見庄・生馬庄・田原庄などの莊園が成立し、他の大和と同様に興福寺の支配がおよぶ。『大乘院寺社雜事記』や『多門院日記』などには、一乘院の衆徒の鷹山氏や「生駒両職人」と称された莊官達がたびたび姿を見せ、活動の一端をうかがうことができる。こうした在地勢力は、高山城や北山原城、栗畠城など市内各所に中世城郭を築いている。文暦2(1235)年に竹林寺の僧寂滅が行基の墓所を發掘し、舍利瓶と墓誌を発見する。行基信仰が盛んになるなかで、寂滅、忍性らは行基をならい社会事業を進め人々の信仰を集めようになる。忍性は、嘉元元(1303)年に鎌倉極楽寺で入寂したが、遺命により行基の眠る竹林寺にも分骨された。墓所は奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査がなされ、花崗岩製八角形柱状外容器の内部に銅製骨蔵器が安置されていた。また、輿山往生院には、正元元(1259)年の鎚を持つ宝鏡印塔、有里の円福寺には2基の鎌倉時代の宝鏡印塔が残り、かつての信仰をうかがわせる貴重な遺物である。長弓寺本堂、高山八幡宮本殿など国宝・重要文化財に指定されている建造物は、中世の建築様式をよくの残すものである。生駒の中世は、活発な人と物の交流が行われていたことが予想できる。発掘調査の出土遺物量が、中世、とくに13世紀後半から14世紀にかけてのものが増加することがそれを裏付けている。

近世に入り江戸時代の生駒は、添下郡と平群郡の22の村に分けられ、旗本領と郡山藩領より構成される。幕末の慶応4(1868)年には、旧旗本松平氏領の11カ村の領民が辻村にある代官の矢野陣屋を取り囲むという事件が起る。その際に作成された村ごとの傘形連判状が今に伝わっている。

近代になると町村制の施行により、北倭村、北生駒村、南生駒村が成立する。その後、合併をくり返し、現在の市域を有するにいたり、昭和46年に市制が施行される。



金比羅窯出土杯蓋



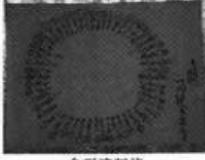
美努岡萬墓



円福寺宝鏡印塔



高山八幡宮本殿



傘形連判状

### III 萩原遺跡第13次・第14次発掘調査

#### 1 はじめに

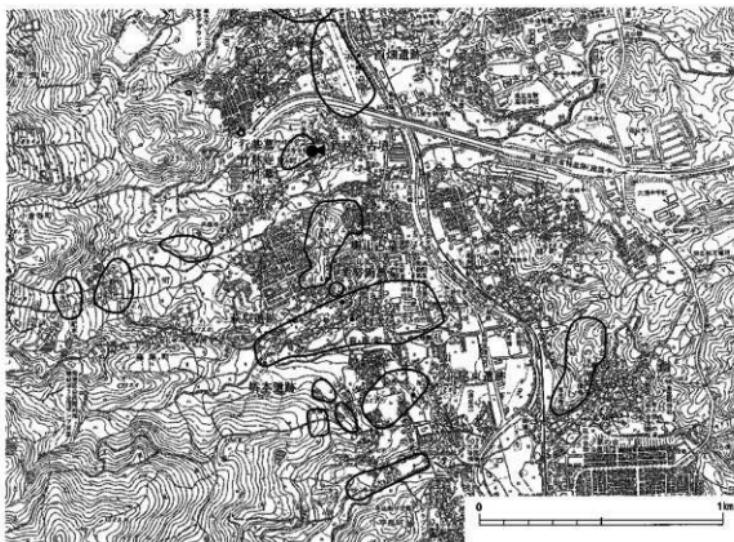
今年度、萩原遺跡では、2件の発掘調査を実施した。萩原町266、265-1の一部で個人住宅建築工事による第13次の発掘調査、萩原町454番・456番の各一部で個人住宅建築工事による第14次の発掘調査である。

第13次調査は、2003年5月1日から2日に実施し、調査面積は約75m<sup>2</sup>。第14次調査は2003年8月4日から6日に調査面積約5m<sup>2</sup>で実施した。

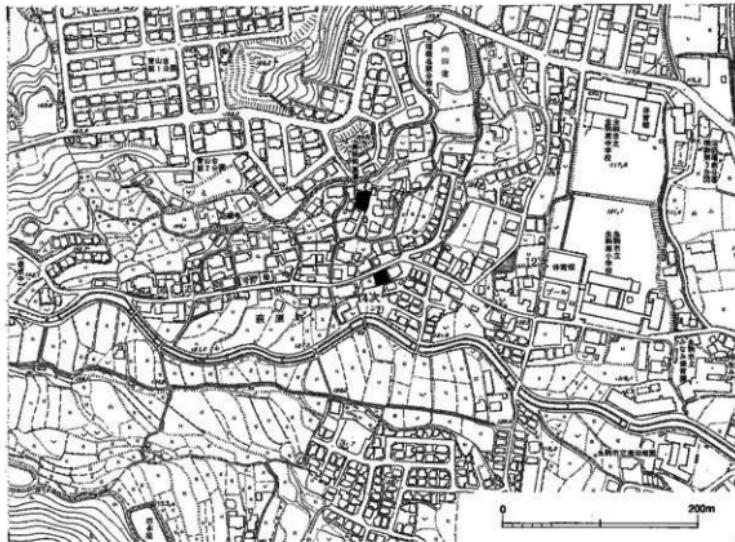
#### 2 位置と環境 [第3・4図、図版1]

萩原遺跡は、生駒山地の山裾の先端部の緩斜面にひろがっている。東に向かって流れる神田川の両岸には河岸段丘も見られる。生駒山地を越えて大坂・奈良を結ぶ暗奈良街道（現国道308号線）が東西にはしり、街道の両側に遺跡がひろがっている。

萩原遺跡は弥生時代の遺物が採取されたとされ、古くより知られていた。1986年の生駒市立南小学校の校舎建設にともなう発掘調査では、弥生時代の遺構は確認されず、中・近世の掘立柱建物・土坑・素掘溝などが確認されたことにどまっている。2001年に実施した第12次調査で初めて弥生時代の遺構を確認した。弥生時代中期の西から南東方向にのびる溝遺構で、遺構内からは弥生土器・石包丁・石鎌などが出土した。弥生土器は在地産以外に、生駒山西麓産のものが大量に含まれていた。山をはさんで大阪側と活発に交流が行われていたことが明らかとなっている。



第3図 濃査地周辺遺跡分布図



第4図 調査地位置図

### 3 萩原遺跡第13次発掘調査

#### (1) 調査区と層序 [第5・6図、図版1・2]

調査地は、奥山古墓群や美努岡萬墓がある丘陵の直下に位置している。萩原遺跡の北端に調査地は位置しているが、今回の調査まで遺跡北部での発掘調査の実施はなく、遺跡の範囲確認に目的を置いて調査を行った。調査地には道幅が狭く重機が入らなかったため、人力掘削により調査を実施した。調査地内に任意に1.2m×6.3mのトレーナーを設定し、遺構の検出を試みた。

層序は、整地土（1層）、褐灰色砂質土（2層、耕作土）、明黄褐色砂質土（3層、地山）となる。

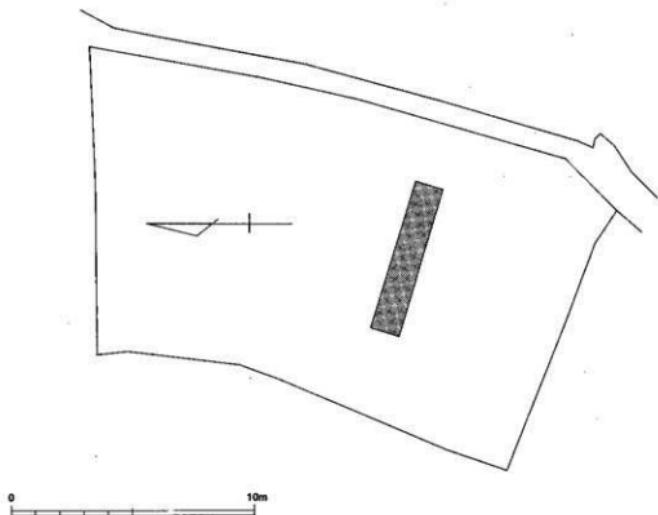
#### (2) 遺構 [第6・7図、図版2・3]

##### 落ち込み1 (SX01)

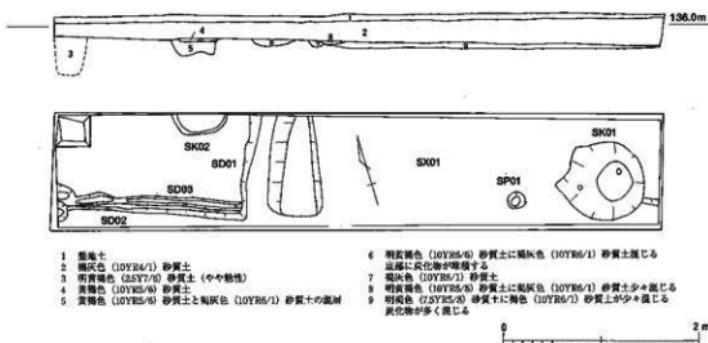
調査区の東側の約3.7mにわたって検出し、調査区外にもひろがる。埋土からは、燃えがらのような炭化物とともに弥生土器、奈良時代の土師器や須恵器が出土した。奈良時代の土師器、須恵器の多くに2次焼成をうけた痕跡が見られる。遺構内に、土坑1 (SK01) とピット1 (SP01) を検出した。8世紀の遺構である。

##### 土坑1 (SK01)

落ち込み1 (SX01) 内で検出した。直径80~90cmの不定形の円形。深さは10~18cm。埋土からは土師器（2）などが出土した。



第5図 トレンチ配置図



第6図 遺構平面図・土層図

#### ピット1 (SP01)

落ち込み1 (SX01) 内で検出した。直径18cmの円形、深さ4cm。遺構内から土師器（3・10）などが出土した。

#### 土坑2 (SK02)

検出長東西55cm、南北20cm、深さ約20cm。遺物は出土せず、時期は不明。

### 溝 1 (SD01)

幅40~50cm、深さ8cm。埋土は明黄褐色砂質土に褐色砂質土が混じる。溝の底部に炭化物が付着していた。遺物は、磁器と土師器の破片が出土した。近世の遺構。

### 溝 2 (SD02)

検出幅15~25cm、深さ2~7cm。信楽産の描り鉢の破片が出土した。近世の遺構。

### 溝 3 (SD03)

幅10cm前後、深さ3cmで遺物は出土しなかった。溝1 (SD01) や溝2 (SD02) と同時期の近世の遺構であろう。

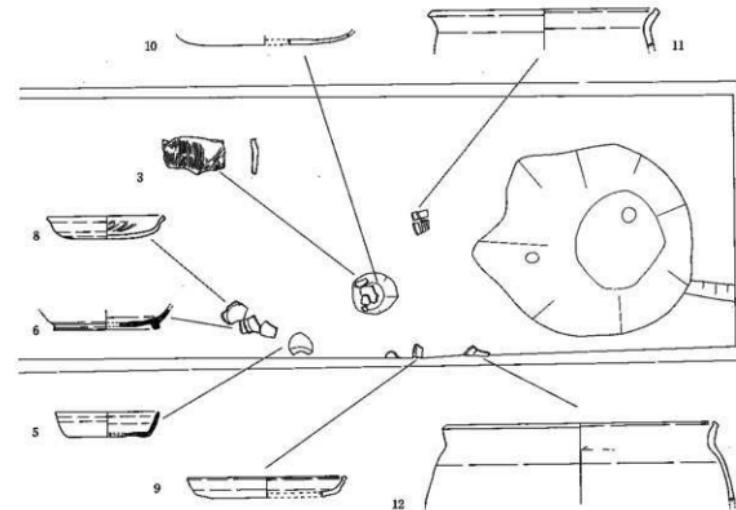
#### (3) 遺物 [第7・8図、図版4]

奈良時代の土器を中心に、弥生土器、中世から現代の土器が出土した。弥生土器の破片が数点出土しており、そのほとんどが生駒山西麓産のものである。固化したものはすべて落ち込み1 (SX01) 出土のものである。

1 弥生土器。壺の頸部か。櫛描縦状文が施されている。いわゆるチョコレート色をしており、生駒山西麓産である。土師器(8)の下から出土した。

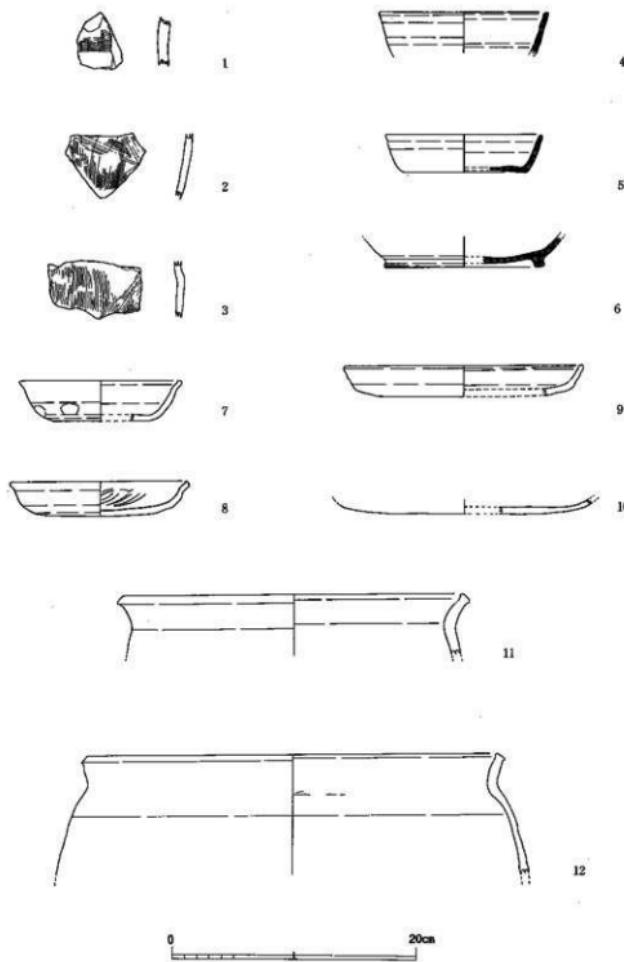
2 土師器。ハケメが施されている。土坑1 (SK01) から出土した。

3 土師器の壺の胴部。ハケメが施されている。ピット1 (SP01) 出土。



第7図 遺物検出状況図 (遺構は1/20、遺物は1/6、土器断面着色は須恵器)

- 4 須恵器。杯の口縁部。復元口径13.6cm。
- 5 須恵器。杯 A。復元口径12.8cm、器高3.1cm。斜め上方に立ち上がり、口縁部付近がわずかに肥厚し端部は丸くおさめる。
- 6 須恵器の底部。高台の断面は方形で高台端面は内傾する。



第8図 出土遺物実測図

7 土師器。皿A。復元口径12.8cm、器高3.2cm。口縁上部はヨコナデされ、口縁端部がわずかに外反する。口縁部下部には指頭圧痕が残る。

8 土師器。皿A。口径14.7cm、器高2.8cm。全体的に2次焼成を受けている。口縁部はヨコナデされ、口縁端部がわずかに外反する。内面の一部に暗文が残っている。

9 土師器。皿A。復元口径19.4cm、器高2.5cm。口縁部にヨコナデが施されている。

10 土師器。皿A。底部のみ。ピット1(SP01)から出土。

11 土師器。甕の口縁部。復元口径27.2cm。口縁部内外面をヨコナデする。口縁端部は肥厚し外傾する。

12 土師器。甕の口縁部から胴部にかけてが出土。復元口径32.4cm。口縁端部は肥厚し外傾する。内面に粘土の継ぎ目の痕跡がわずかに残る。

#### (4) 小結

調査地北の丘陵上には、奥山古墓群という墓域がひろがり、奈良時代の官人の美努岡萬墓もある。調査地はまさにそのふもとに位置し、今回の調査で奈良時代の遺構が確認できた。調査地は、奥山の墓域の入口部分にあたり、関連が想定される。奥山墓地の成立が奈良時代にさかのばる可能性も考えられよう。また、調査地北東には安明寺があったと伝えられ、その関連を考えるうえでも重要な資料となろう。

### 4 萩原遺跡第14次発掘調査

#### (1) 調査区と層序　〔第9・10図、図版5〕

調査地は、暗奈良街道の街道筋に面しているが、国道の道路面から調査地の地表面までは約2.6mの落差がある。この落差は神田川の段丘崖であり、調査地は下位の段丘面上に位置している。

調査地には重機が入れられず、人力掘削により調査を実施した。調査地内に任意に南北約1.5m、東西約3.5mのトレンチを設定し、遺構の検出を試みた。基本層序は、整地土（1層）、黄灰色砂質土（2・3層、耕作土）、灰色中粒砂（4層）、灰白色細粒砂と明黄褐色極細粒砂の混層（5層）、橙色細粒砂（6層、地山）にいたる。灰白色細粒砂と明黄褐色極細粒砂の混層（5層）は、中世の遺物包含層。

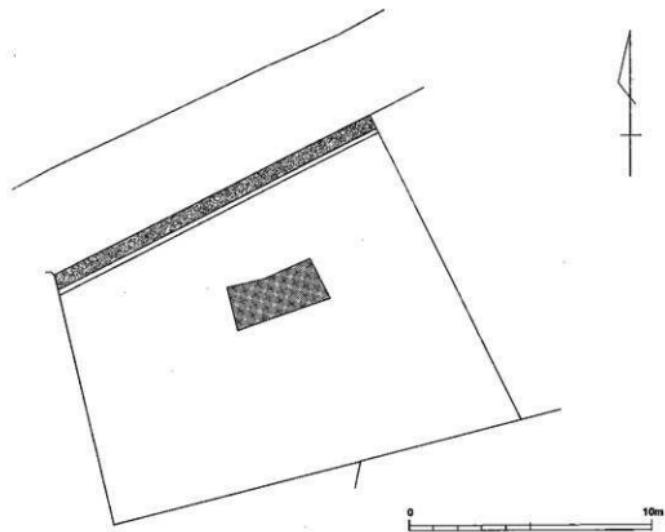
#### (2) 遺構　〔第10図、図版5・6〕

橙色粘性極細粒砂層の上面で柱穴などの遺構を検出した。

#### ピット5 (SP05)

直径22cm、深さ21cm。底部で扁平な自然石と木製品（3）を検出した。これらは礎石・礎盤として利用されたと考えられる。柱の高さ調節のために敷かれたものか、湧水量が多く柱の根腐れを防ぐために敷かれたものであろう。埋土から瓦器碗（1・2）の破片が3点出土した。土器の年代から14世紀の遺構。

#### ピット4 (SP04)



第9図 トレンチ配置図

直径25～28cmの円形。柱痕の底までの深さは18cm。遺構内から瓦器枕（4）の破片などが2点出土した。

#### ピット3 (SP03)

直径28～30cmの円形。柱痕の底までの深さ25cm。底には地山の石が露出する。遺物は出土しなかった。

#### ピット2 (SP02)

不定形の直径40cm、深さ15cm。遺物は出土しなかった。

#### ピット1 (SP01)

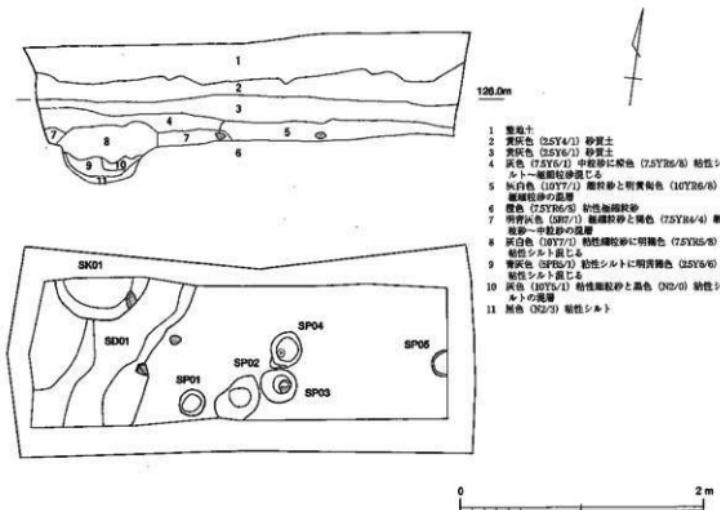
直径20cmの円形。埋土は灰色極細粒砂から細粒砂で深さ10cm。遺物は出土しなかった。

#### 溝1 (SD01)

幅50～70cm、深さ3～10cm。遺構内から、瓦器（5）や東播系片口鉢の口縁部（6）が出土した。

#### 土坑1 (SK01)

調査区の北西部で検出した。検出長75cm、幅35cm、深さ11cm。埋土に大量の炭をふくみ、地山を掘り起こし、燃えがらとともに埋め戻している。ごみの焼却用土坑であろう。土器等は遺物は出土せず時期は不明。他の遺構より新しい遺構である。



第10図 遺構平面図・土層図

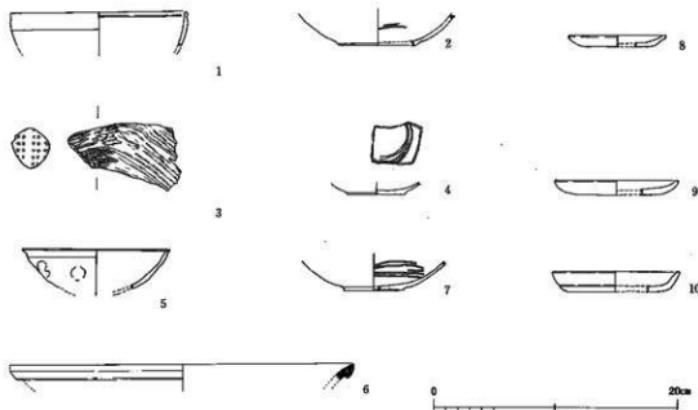
(3) 遺物 [第11図、図版7]

弥生土器も数点出土したが摩滅しており図化できたのは中世のものである。

- 1 瓦器椀。ピット5（SP05）から出土。口縁部にヨコナデ、内面はミガキが施されている。
- 2 瓦器椀。ピット5（SP05）から出土。内面にミガキがわずかに残る。
- 3 ピット5（SP05）の底部出土の木製品。一方の小口は丸いがしだいに薄く扁平になる。最大径は3cm。
- 4 瓦器椀。ピット4（SP04）から出土。見込みに同心円状の暗文が施されている。高台は底部全面にはり付けられておらず、一部に高台がない部分があるなど、雑な作りである。時期は14世紀のもの。
- 5 瓦器椀。溝1（SD01）出土。口縁端部に強いヨコナデがされ、体部に指頭圧痕が残る。
- 6 東播系片口鉢。溝1（SD01）から出土。口縁部の肥厚が外面に丸くふくらみ、下端も下方に突出する。内外面ともにヨコナデする。14世紀のもの。
- 7 瓦器椀。5層の遺物包含層から出土。内面はミガキを施す。高台を張り付けるが雑な作りである。14世紀のもの。
- 8 土師器皿。5層の遺物包含層から出土。復元口径7.8cm、器高0.9cm。内面にナデ調整を施す。
- 9 土師器皿。5層の遺物包含層から出土。復元口径10.0cm、器高1.2cm。口縁部にわずかにヨコナデ調整、底部外面に指頭圧痕、粘土の雜ぎ目の痕跡が残る。
- 10 土師器皿。5層の遺物包含層から出土。復元口径10.0cm、器高1.7cm。口縁部にヨコナデが施されている。

#### (4) 小結

期待した弥生時代の遺構は検出できなかったが、中世の遺構を検出することができた。弥生時代から奈良時代にかけての集落は、調査地の北の一段高い段丘上にひろがっていたものと考えられる。低位の段丘面上に住居域がひろがるのは中世以降であることが明らかとなった。その要因は、街道の発展による集落域の拡大や人家の移動によるものなどが考えられる。



第11図 出土遺物実測図

#### 5まとめ

萩原遺跡については、生駒市内でも古くから知られ代表的な遺跡であるが、その実態はよくわかつてはいなかった。近年、小規模ながらも調査が続いている。これらにより、弥生、奈良、中・近世と続く遺跡であることが明らかになってきている。

弥生時代の萩原に住む人々は、生駒山地を越えて大阪側と活発に交流が行われていた。弥生土器に占める生駒山西麓産の割合の多さはそれを裏付ける。弥生時代には暗峠を越える道筋ができていたことを物語っており、たいへん興味深い。

奈良時代になり都が平城京に遷都されると、難波京と平城京を最短距離で結ぶ街道筋となる。これによりさらに人と物の往来が活発になり、街道集落が形成された。また、この地域は行基の活動域である。有里竹林寺の発掘調査では鎌倉時代の遺構しか検出されておらず、行基建立の寺院がこの付近に存在した可能性もある。

都が京都へ移った後は一時より往来は減ったと予想されるが、中世、近世を経ても街道は奈良・大阪を結ぶ交通路として機能し続けた。近代になって鉄道が敷設されると、街道は衰退していった。

現在は宅地化が進み、街道筋の名残を残す物は見あたらないが、その地下に人と物の交流を示す遺跡が眠っている。萩原遺跡は市内でも有数の遺跡であり、今後、古墳時代の遺構が見つかる可能性も高い。今後の調査に期することは大きい。

## IV 小平尾東遺跡第2次発掘調査

### 1 はじめに

小平尾町201-1、201-2で、個人住宅建築工事とともに埋蔵文化財発掘の届出を受けた。

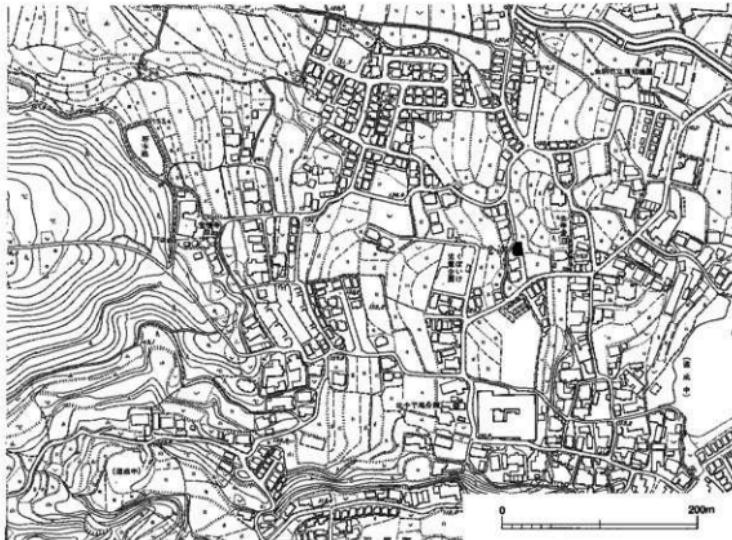
調査地は、小平尾町所在の遺物散布地の中央部やや東側に位置し、遺跡の概要確認のための発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、2004年3月8日に実施した。調査面積は、約3.6m<sup>2</sup>であった。

### 2 位置と環境 【第3・12図、図版8】

小平尾東遺跡がある小平尾町は、生駒谷の南部に位置し、生駒山地の山裾の先端部の緩斜面に人家や田畠がひろがっている。調査地も、東に向けて緩やかに下る棚田地形の一角に位置している。調査地の東側は、急斜面になっており、谷状の落ち込みとなる。

小平尾町では、縄文土器や弥生土器が採取されたとされているが、発見場所やその内容は不明で、発掘調査例も少なく遺跡の実態はよくわかっていない。神田川をはさんで北側には萩原遺跡があり、縄文・弥生時代の遺跡がある可能性は高い。集落の最も高い場所には、室町時代の本堂を持つ宝幢寺がある。1999年に実施した宝幢寺北側の塔基遺跡の発掘調査では中世の瓦や土器等が出土している。宝幢寺はかつては大きな伽藍を持っていたとされ、門前集落が形成されていたと考えられる。また、調査地の東側には庚申堂という小堂があり、室町時代の五輪等などが祀られている。近年は田畠が宅地に変化し、急速に宅地化が進んでいる地域である。



第12図 調査地位置図

### 3 遺跡の調査

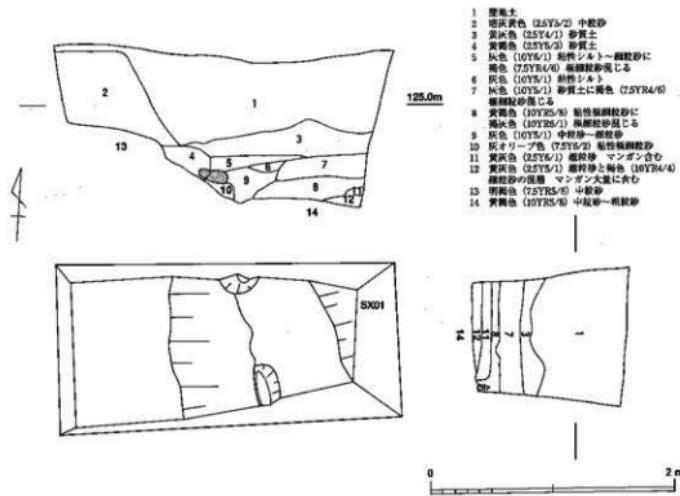
#### (1) 調査区と層序 【第13図、図版8】

浄化槽埋設部分に南北13m、東西28mのトレーニングを設定し調査を実施した。東側は整地土(1層)、暗灰黄色中粒砂層(2層、植栽土)、明褐色中粒砂層(13層、地山)にいたる。西側では整地土(1・3層)、灰色粘性シルト～砂質土層(5・6・7層、耕作土)、黄褐色粘性細粒砂層(8層、床土)、黄褐色中粒砂～粗粒砂層(14層、地山)を基本とする。

#### (2) 遺構 【第13図、図版8】

地山面上まで掘り下げを行い遺構を検出した。西側の上段面と東側の下段面とでは約55cmの段差がある。下段は地山を削ることで平坦面を作り出しており、下段の段差部に南北方向に石を並べている。棚田は、地山を削った後、砂粒がたいへん細かく均質な粘質シルト(10層)を敷き、その上に石を置いて造られている。石の固定と漏水に対して配慮がなされていたと考えられる。

トレーニング東端では地山面の落ち込み(SX01)を検出した。黄灰色細粒砂層と褐色細粒砂層の混層(12層)から須恵器の小片が出土した。



第13図 遺構平面図・土層図

### 4 まとめ

棚田の形成時期については決定的な証拠を得るにはいたらなかったが、中世にさかのほることも十分考えられる。今後の調査に期待したい。

# 図 版





調査地付近航空写真



着手前状況（北西から）



北壁土層



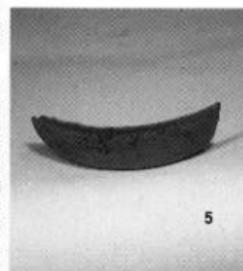
遺物検出状況（北から）



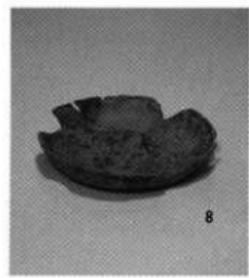
遺物検出状況（南から）



遺構掘削前後状況（東から）



5



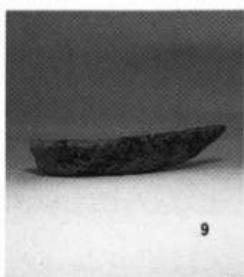
8



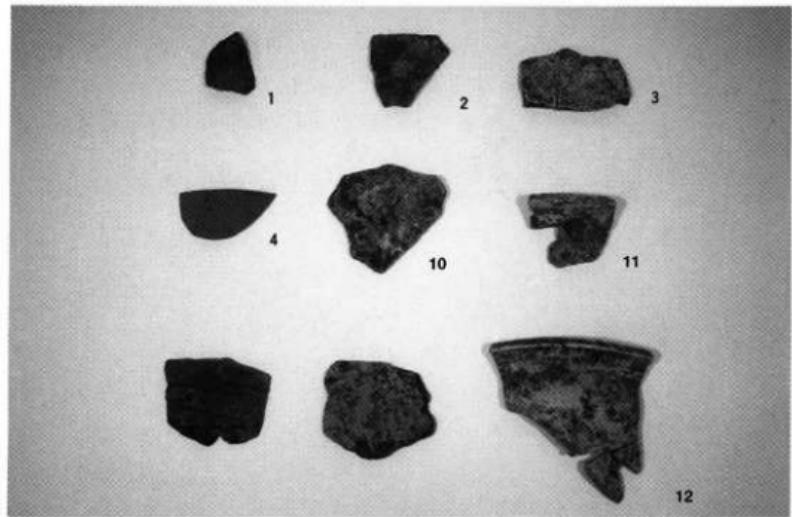
6



7



9



出土遺物



着手前状況（北東から）



遺構掘削後状況（西から）

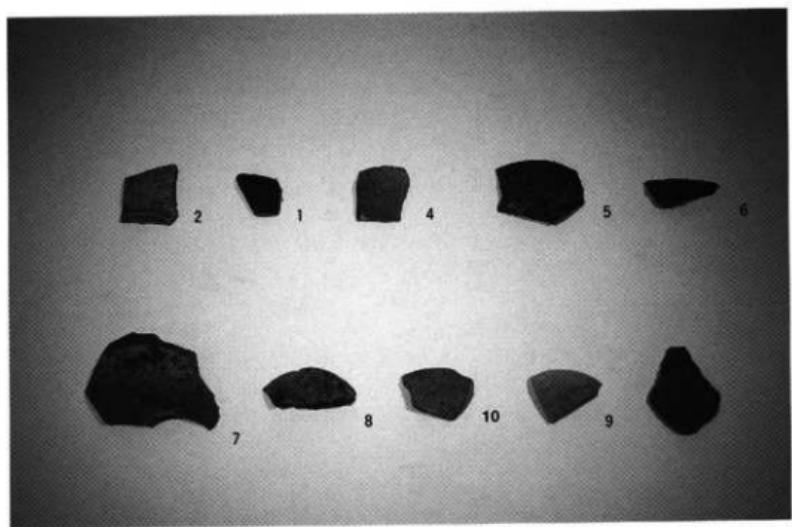
図版 6 萩原遺跡第14次発掘調査



ピット 5 (SP05)



土坑 1 (SK01)



出土遺物

西壁土層



着手前状況（南西から）



掘削後状況（西から）

## 報告書抄録

ふりがな	いこましないいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	生駒市内遺跡発掘調査概要報告書 2003年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	生駒市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	矢田直樹							
編集機関	生駒市教育委員会							
所在地	〒630-0288 奈良県生駒市東新町 8番38号				TEL 0743-74-1111			
発行年月日	西暦 2004年 3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
萩原遺跡	奈良県生駒市 萩原町266、 265-1の一部	29209		34° 39' 47"	135° 42' 21"	20030501 20030502	7.5	個人住宅 建築工事
萩原遺跡	奈良県生駒市 萩原町454 456の各一部	29209		34° 39' 44"	135° 42' 21"	20030804 20030806	5	個人住宅 建築工事
小平尾東遺跡	奈良県生駒市 小平尾町201 -1, 201-2	29209		34° 39' 32"	135° 42' 28"	20040308	3.6	個人住宅 建築工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
萩原遺跡	集落跡	弥生 奈良 中世 近世	落ち込み 土坑 ピット 溝	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器				
萩原遺跡	集落跡	弥生 奈良 中世 近世	柱穴 ピット 溝 土坑	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 木製品				
小平尾東遺跡	遺物散布地	中世	棚田 落ち込み	土師器 須恵器				

生駒市文化財調査報告書 第17集  
生駒市内遺跡発掘調査概要報告書  
2003年度

2004年3月31日

編集・発行 生駒市教育委員会  
奈良県生駒市東新町8番38号

印刷 明新印刷株式会社  
奈良市南京終町3番464号

